
揺れないブランコ

クルクルココロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

揺れないブランコ

【Nコード】

N1359W

【作者名】

クルクルココロ

【あらすじ】

小説家が無気なく書いた一編の詩。見知らぬ街の地図。現実にしさを見いだせない彼は静かに目を閉じた。

創造（前書き）

是非縦書きにして読んでみてください

創造

一つ詩を書いてみた。

青の光、赤の光、緑の光

光が映す面影はどんな姿のあなたでしょう

そんなに深くうつむかないで

あなたの色が見えなくなるから

小説家にとって小説を書く作業というのは非常に奇妙な体験である。僕は小説を書くたびにいつも思う。この世界はもしかすると正しい世界ではないのではないかと。僕の世界は少なくとも僕の意志の下でかろうじてではあるがその体裁を保っているし、そこにはしつかりとした法則性がある。

それとなく詩を書いてしまったのは僕が少しかり感傷的な気分になっていたからに他ならない。それに詩を元に小説を書くというのも悪くない気がしたのだ。僕が好きな作家の作品にはしばしば歌が登場する。

今、書いている小説には巨大なビルが出てくる。見上げても最上階が見えないぐらいの高さだ。ところがそれだけ大きなビルにも関わらず窓は一つもない。壁面は全て鉛色のコンクリートで塗り固められていて、その姿は大きな墓石を彷彿とさせる。

その街には朝が来ない。一年中夜なのだ。空には星も見えなければ月も見えない。光を放っているのは所々にある街灯だけで、外はいつも深い闇に包まれている。

そんな街には奇妙な住人たちが住み着いている。全身真っ黒の大男やスコップで地面を掘り起こす老人、そして公園で一人遊ぶ少年。僕は街の地図をルーズリーフに描いた。それは街と呼ぶには小さすぎる街であった。それでもこれは僕の頭の中にある街なのだ。実

体はないかもしれないが、僕の中では街が確かに存在しているのだ。描いた地図を見ながら小説を書いていると急に眠気が襲ってきた。時計を見ると深夜二時であった。僕は一旦作業を中断してベッドに横になった。目を閉じると暗闇の中にその街並みが広がってきた。そうだ。これが僕の望んでいた街だ。

重い瞼を上げるとそこにはいつもの天井があつた。僕は少し哀しくなった。やはり正しいのはこの世界なのだ。ここにある世界が唯一の世界で僕の世界は間違つた世界なのだ。少し苛立ちを覚えた僕はこの世界に反抗するかのようにもう一度静かに目を閉じた。

模倣

カーテンの隙間から差し込む日の光で目を覚ました僕は、まず時計を見た。時刻は一時過ぎであった。寝ぼけ眼でベッドからゆつくりと起き上がりカーテンを開ける。快晴だ。雲一つない。こんなに素晴らしい天気にも関わらず僕は昼過ぎまで惰眠をむさぼってしまった。僕は少し損をしたような気がした。

お腹が空いていたので近所のコンビニに向かうことにした。外に出て太陽の光を全身に浴びてみると多少清々しい気持ちになった。隣家の庭に生えている木々からスズメの鳴き声が聞こえる。

コンビニの店内に入って、まずは雑誌のコーナーで週刊誌を立ち読みした。相変わらずくだらないことを記事にしている。低俗だとは分かっているけど読みながら思わずにやけてしまうのは僕自身も一人の低俗な人間だということなのだろう。一通り読み終えると週刊誌を元に戻し、奥にある食品コーナーで寝起き一番の飯を物色した。手軽なものが食べたかったので、目の前にあったサンドイッチと野菜ジュースを手に取りレジへと向かった。

店員が商品のバーコードを読み取り始めた。ふと店員を見ると、とても綺麗な女の子だった。些細な出来事かもしれないが、その日初めて出会った人が綺麗かどうかというのは僕にとっては結構重要だったりする。実際僕はお金を払いながら、今日は何かいことが起こりそうな予感がしたし、それは少なからず僕の気持ちを前向きにしてくれた。

公園のベンチに座ってサンドイッチを食べながら執筆中の小説について考え始めた。そういえばあっちでは少年が公園で遊んでいた。それも一人で。友達も親も兄弟もない。その少年は公園で遊び続けている。その公園はとも小さな公園であるため遊具が一つしかない。ブランコだ。それも揺れないブランコ。少年は何が面白いのか分からないのだが、一人そのブランコで遊び続けている。

サンドイッチを食べ終わって、野菜ジュースも飲み干してしまつた僕は少しブランコで遊んでみることにした。ブランコにゆっくりと腰掛けてみると案の定ブランコは揺れた。ブランコという遊具は揺れるために存在しているのだ。そして、僕たちはその揺れに身を任せて遊ぶ。ただ僕の小説に登場する少年はそんなこと知る由もないのだけだ。

小説の中の小説

自宅に着いた僕はカーテンを閉めて部屋全体を暗くした。机の上に置いてあるスタンドを点け、執筆中だった小説を引き出しの中から取り出した。机の横にあるボードには街の地図が貼り付けてある。僕は鉛筆をペン立てから一本取り、白紙のルーズリーフに小説の続きを書き殴り始めた。

いつからだろう。僕は僕も知らない間にこの街の住人になっていた。街の名は分からない。今日は僕がこの街に来てからおそらく三日目だ。いや、街に来たと言うと少し語弊があるかもしれない。三日ぐらい前から僕はここにいたと言うべきかもしれない。

僕は自宅を出て、大男に会いに行くことにした。彼なら何か知っているかもしれない。僕がなぜこの世界の住人になってしまったのか。そして、この世界が一体何なのか。

大男は相変わらず黒かった。上から下まで身につけているものは全部すすで汚れていた。

「こんばんは」

「ああ、新入りか」

「少し聞きたいことがあるのですが」

「何だ」

「あなたは普段何をしていますか」

「見れば分かるだろう。散歩だよ」

大男はそう言ってまた歩き出した。僕も大男に遅れないようについて行く。

「散歩ですか」

「そうだ。散歩をしながらすすを集めているんだ」
「すす」

「この世界にはたくさんのすすが浮いているんだ。おれはそれを集

めてる」

「それは仕事ですか」

僕がそう尋ねると大男は少し困ったような顔をした。

「おれたちは仕事なんてしない。仕事をするのはあいつらさ」

「あいつら？」

「ビルがあるだろ。あそこの中で暮らしているやつらさ」

大男は道の先を指差した。指の先には巨大なビルがそびえ立っていた。

「あの中で暮らしている人がいるのですか」

「ああ。おれたちには関係のない世界だけだな」

大男は少し苛立っているようだった。

「僕は何をすればいいのでしょうか」

「自分で考えろ。おれが考えることじゃない」

そう言い残すと大男はそのまま早足で行ってしまった。

大男からは結局何一つ有益な情報を聞くことができなかった僕は何気なく近くの公園に入った。

「新入りだね」

声のする方を向くと、少年がブランコに腰掛けていた。

「また君か」

「どうだい。この世界には慣れた？」

「いいや、全く」

「僕も最初は何をすればいいのか分からなかったよ。何せここにあるものは全てどこかが変だからね」

「そのブランコみたいに？」

「そう、何かしら欠陥があるんだ」

「君はどうしてブランコで遊ぶことにしたんだ」

「別に何でも良かったんだ」

少年はブランコを漕ぐふりをした。だがブランコは揺れなかった。

「それは楽しいのか」

「考えたことないね」

「そうか」

「新入りも早く見つけなよ。何でもいいんだからさ」

少年はそう言って微笑を浮かべた。一体僕は何をすればいいのだろう。得体の知れない不安感に苛まれながらも僕は、公園を後にして大通りをビルに向かって歩き出した。

頭の中の小説

僕はここまで書き終えると鉛筆をペン立てに戻した。時刻を確認すると4時過ぎであった。回転椅子から立ち上がって食器棚からカップを取り出し、流しで水を注ぎ、一息に飲み干した。何、急ぐことはない。僕はまだここにいます。そして、僕の中の僕もそのままベッドに横になって目を閉じるとやはり見知らぬ街並みが広がってきた。そのときふと気づいたのだが、街の細部が変わり始めている。こんな場所に公衆電話などあっただろうか。僕は奇妙な感覚に囚われた。

街が街自身を進化させている。もしくは僕自身が街を変えてしまったのだろうか。いや、どちらでも構わない。僕はその街を語るだけだ。

目を開けると僕は更に不思議な気配を感じた。まるで僕が僕自身でなくなっていて、他の誰かが僕と入れ替わってしまったような気がした。長く向こうの世界に止まりすぎたのかもしれない。僕の中の僕がこちらの世界に近づいてきている。

僕は目を閉じて頭の中で少し考えることにした。

大通りを道なりに歩いていると左手に公衆電話ボックスが見えてきた。その公衆電話ボックスは暗がりの中でぼんやりと光を放っており、丁度街灯のような役割を果たしていた。周りには無数の小さな虫たちが飛び回っている。僕はそのときこの公衆電話がこの世界にはあるまじきものであるように思えた。

電話ボックスの中には緑色の公衆電話と電話帳が置いてあった。僕は電話帳の中を確認してみた。ところが電話帳の中身は全て白紙であった。公衆電話の受話器を取って耳に当ててみると風の音が聞こえた。その風はどこか広い荒野で寂しく吹きすさんでいるようだった。硬貨投入口は茶色いガムテープでびったりと閉じられており

硬貨を入れることはできなくなっていた。

僕は受話器を元に戻して電話ボックスを出た。顔の周りを飛んでいる虫たちを右手で払いのけながら電話ボックスを離れ、また巨大なビルの方へと歩き始めた。

右手に小さな神社が見えてきた。どこからか地面を何かで掘り起こす音が聞こえてきた。それはどうやら本殿の裏から聞こえてくるようだった。気になった僕は鳥居をくぐり抜け、裏へと回ってみた。薄汚い格好をした一人の老人がシャベルを使って地面を掘っていた。そこにはすでに膝丈ぐらいまである穴が出来上がっていた。僕が声をかけようとするや老人は僕に気づいたみたいで作業を中断して穴の中から出てきた。

ふと携帯電話が鳴ったので僕はベッドから飛び起きた。携帯の画面を確認してみると公衆電話からだった。通話ボタンを押して電話に出てみたものの相手の声が全く聞こえない。しばらく待ってみたが、終始無言のままである。僕は電話を切った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1359w/>

揺れないブランコ

2011年9月9日03時22分発行